

Die (友情) Freundschaft

事務局：
〒010-1632 秋田市新屋大川町 12-3
秋田公立美術大学 野村研究室内
<http://www.jdg-akita.org>
(018)888-8110
nomura@akibi.ac.jp

歌から入ったドイツへの興味

副会長 添野武彦



私がドイツ語に興味を持ったのは、中学校時代に見た映画《菩提樹》であった事は、何かの機会に書いた。繰り返しになるが、有名なミュージカル《サウンド オブ ミュージック》のモデルになった、オーストリアのトラップ家の人々の故国での音楽活動。その後ヒトラーによるオーストリア併合を嫌った、この家の主トラップ男爵と、彼を支え一家を支えたマリア夫人らが故国を捨て、家族と音楽指導・指揮を担当した神父のヴァスナー氏共々アメリカに渡り、亡命移住先のこの国で合唱活動を開始するところまでを描いた映画であった。曲の優雅さ、背景の美しい画像に巧くマッチした流麗なメロディーと、言葉のもつ美しさに惹かれた。やっとな英語を習い始めたばかりであったにも拘らず、いつかこの歌詞を覚えたいものと思った。大学生になり、第二外国語でドイツ語が必修であったことと、ドイツ語会話の授業が教養課程のカリキュラムに組み込まれていたことが幸いした。当時、会話の授業を担当されていたのは、ミュンヘン出身のフリッツ・オピッツ先生(Fritz Opitz)であった。先生はまた、ドイツ人としては草分け的な日本学(Japanologie)の研究者であった。この先生から授業の他に、クラブ活動としてドイツ語会話を教えて頂いた。

では、語彙の少なかった私としては何を始めたか？教科書は勿論として、早速、あの《菩提樹》の収録されている【シュェーベルト《冬の旅》】の楽譜を購入した。しかし、初心者がいきなり詩に挑戦するのは、聊か無謀というものだが、そこは若さの愚かしさ。ただ我武者羅に自分なりに直訳に挑んだ。この詩集は、しかし、失恋の歌集であり、第1番《お休み》から始まって内容が暗い。憧れていた《菩提樹》も何となく物寂しい。終曲の《つじ音楽士》に至っては、何とも人生の悲哀を感じる。表面的にはそうだが、仲々含蓄のあるものであった。途中何回も翻訳に挫折し、人生経験を積みながら反復し読むことで、味わいを感じるようになった。

ドイツ語の歌を覚えようとする、こんな固い音楽しか無いのか？と悶々としていたとき、これと対極にある歌に遭遇した。《O du lieber Augustin!》という歌である。“家の中に何も無い、お金もない、家具もない、何もかにも無い！”という

歌詞なのに、メロディーは至って陽気で調子が良い。後年仄聞したことであるが、

この歌は中世にペストがヨーロッパに蔓延した悲惨な時代に作られたというのであるから、啞然とするしかなかった。この陽気さはドイツ人のどこから派生してくるのだろうか？疑問であった。

その後も幾つかの歌に出会い、その都度直訳してみた。真面目な歌詞のものでは、旺文社の大学入試講座の放送開始時に使われていた曲《Freud euch des Lebens》。これはこの歌い出しの次に《weil noch das Laenpchen glueht, . . .》と続く。要するに、人生を楽しめる時に楽しもう。艱難汝を玉にす。人生禍福はあざなえる縄の如し。雨の後には晴天が来る等々。いかにも試験勉強を乗り越えさせるには最適の歌詞であった。しかし、もっと楽しいのが、ドイツの人々がビアホールで飲みながら集団で歌う与太歌である。そのうちの一つを抜粋；“Wer hat das bezahlen! Wer hat das bestellt? Wer hat das so pinke pinke, Wer hat so viel Geld?”など、酔っぱらいの無責任な歌もある。こんな楽しい歌詞があるのだから、歌から言葉に入っていく、もっとドイツの方々の奥深さに触れたいものである。また、このような砕けた、馴染み易い言葉・音から入っていく方法が、ドイツ語に親しむための一つの方法ではないだろうか。ドイツ語に限らないが、日本語も含め話し言葉は、所詮、音楽と同じだと認識すれば、堅苦しい文章から入るより容易にかの地の言葉という音、そして活字に親しむことが出来るような気がする。そして、ドイツ民族の考え方を幾らかでも理解する一助となればと考えている。

だがこのような願望を持ちつつも、結局達成出来たのは歌う事ができるようになっただけであった。何が欠けていたのだろう。多分、自分に対する甘さであろうか？反省、反省のうち半生が過ぎてしまった。でも、機会を捉えて、ドイツ語に飽くなき挑戦を続けるつもりである。牛車に立向う蟻螂に似ていないでもないが、ドイツに関する興味は、まだまだ尽きない。

《会員よりご寄稿いただきました》

「途絶えることのない友情」

会員 萩原易雄

天外から斜に降る光は石積みの壁を伝い床に届き、それは石畳みを温め僅かな塵埃を巻き上げ陽炎の如く淡い明暗の柱となり、そして仄かに八方を照射す。静寂の漂う夕方の教会内の歩廊なのか内陣なのか。その写真は今も脳裏から消えることがない。

「いい写真だろう。」と偶然にも私も所有しているテッサールレンズ装着の沈胴式ローライ 35Tを話題の時に、山脇健さんが見せて下さった一葉であった。それは、私が初めてドイツを訪れる前のことであったから、昭和 53 年頃、秋田市文化使節団がパッサウへ訪問した時に撮ったものではなかったか。

当協会主催のパッサウ市民交流団来秋歓迎晩餐会は千秋公園千秋亭で、昨年 10 月 25 日夕刻開催された。民族衣装をまとい同席されたドイツ女性二人のなかのガブリエレ・フロイドリング夫人が、数年前旅立たれたご主人と彼女の思い出再確認のため、彼女の友人バルトラウド・ビッケル夫人を誘った旅でもあった。晩餐会の彼女達は、来訪団員の演奏するバイエルン地方の曲に乗りダンスを舞い、同卓の協会会員との歓談など、彼女たちに楽しい旅の思い出となるだろう一夜であった。フロイドリング夫人からミュンヘン在住の弁護士であることと、ご主人ティルマン氏がバイエルン州政府パッサウ建設事務所の職席にあった時を紹介する名刺それぞれを頂戴した。そして、ケン・ヤマワキを知っているかと謂う。

私の知る山脇健氏とは秋田市で事務所を構える建築家であり、西欧を旅する時の心躍る風景や建造物の歴史的価値などを



ガブリエレ・フロイドリング夫人（丸囲い）
バルトラウド・ビッケル夫人（隣）、本協会会員（後列）
2014年10月25日 歓迎晩餐会 千秋亭にて

熱く語る人物であった。その方は、死去されてもはや 20 年近く経過しているではないか。

秋田市とパッサウ市交流開始初期の時代から度々彼の地を訪れる山脇氏と、彼女のご主人は同職だったことで意気投合し、その後の長い両家の親交となったようだ。その交流の 30 余年を経て初めて、友情の要を築く二人の亡くなった今、ご主人と家族と共に語る、未だ見ぬ地に寄せる思い出を胸に秘め、彼女は知人山脇健氏の暮らした秋田の地に脚を運ぶ事となったと謂う。

晩餐会終宴となり、城跡の千秋公園を下りその御堀端や旭川の流れに臨む土手長町の宿までの街並みを巡る道は、ほんの一時の散歩がてらの街並み案内であった。そして、その両家主人亡き後の歳月を経て、彼女を秋田に導く友情とはどのようなものであったろうか。それは、思いを巡らせるには余りにも短い道すがらであった。

ミュンヘンを旅する時、脚を運ぶこととなるニンフェンブル



ティルマン・フロイドリング氏
1990年5月6日 ガルミッシュにて
「フロイドリング夫人より提供」

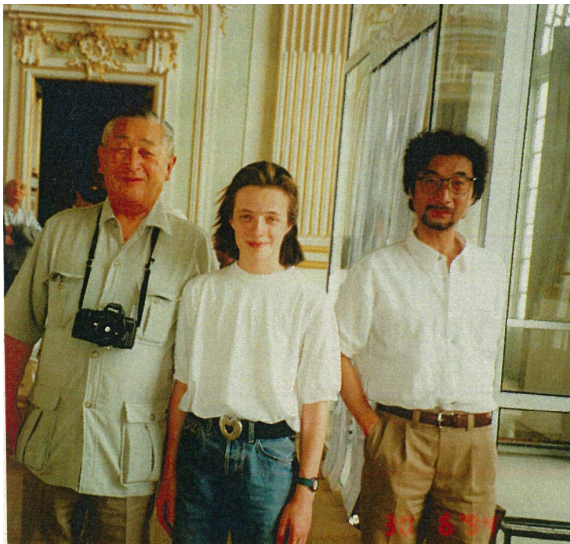


山脇 健氏 *ローライ 35T と共に
1990年5月4日 パッサウにて
「フロイドリング夫人より提供」

グ宮殿の優雅さと室内の華美さに驚嘆することとなる。フロイドリング氏は亡くなる直前までその施設管理者の任にあったということを、後日、協会副会長の渋谷義博さんから伺っている。彼女からのメールに、渋谷さんと古村さん（前会長）に宜



フロイドリングご夫妻、渋谷氏、古村氏（前会長）
1994年7月3日
ミュンヘン・ホフプロイハウス前にて
「フロイドリング夫人より提供」



古村氏（前会長）、ブローニー・フロイドリング嬢、山脇氏
1994年7月3日
ミュンヘン・ニンフェンブルグ宮殿にて
「フロイドリング夫人より提供」

しくとあり、この御二方もフロイドリング家との厚誼は長く続いているのである。

後日談。私は、山脇健さんとフロイドリング夫人のみならず、これに目を通していらっしゃる方々に「ゴメンナサイ。」を謂わなければならない。この原稿締切迫る時、フロイドリング夫人から過日のものとは別の写真が送られてきた。何と、彼女と山脇氏そして私も写っているものがあるではないか。それは、1994年7月2日聖アンナ教会を会場にした秋田市美術工芸展初日の写真であった。その前日まで、この設営に難渋した後だったからであろうか。彼女は同封の文面にも、20余年前の事は記していない。双方とも40代の若い姿で撮られ、その記憶がないのである。失態、笑止千万。

私も姉妹都市に関わることで、旭北小学校の訪問、工芸展の打ち合わせとその実施、交流25周年記念訪問と、この間、30年の交誼が続くあるご家族があります、こちらにも、ご機嫌お伺いの手紙を出さなければ。



山脇氏、萩原、フロイドリング夫人
1994年7月2日
工芸展会場・聖アンナ教会にて
「フロイドリング夫人より提供」

~~~~~

## 《平成 27 年新年祝賀会》

平成 27 年 2 月 14 日（土）に秋田キャッスルホテルにて新年祝賀会が開催され、41 名の会員がご参加くださいました。18 時より講演会が行われ、その後懇親会が開催されました。

講演会テーマ：「一年間のドイツ滞在を振り返って」

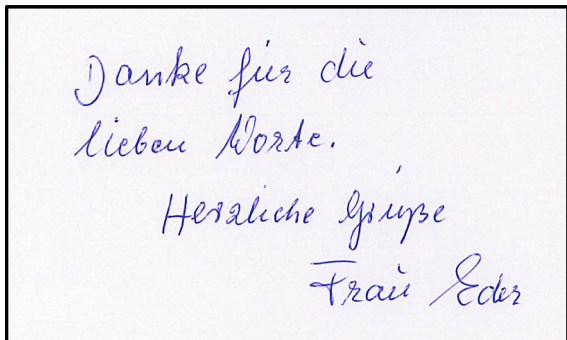
講師：医学博士 柳原せい子氏（株式会社グットネイバー薬局 支援部）

定年退職後に、ドイツへ1年間の語学留学を決意し渡独。留学中の語学学校ゲーテ・インスティテュートでのご苦勞、出会いやエピソード、パッサウ訪問の様子などをスライドで楽しくご講演いただきました。



## 《訃報》

「秋田市—パッサウ市姉妹都市交流」の深化に多大な貢献をされたパッサウ市元市議会議員ヨゼフ・エダー氏が、去る2月25日に逝去されました。下記に、3月、松田会長が届けられた弔意に対するご令室からの謝辞を抄訳します。



愛に満ちたお言葉に感謝いたします。  
深甚なるご挨拶とともに  
エダー



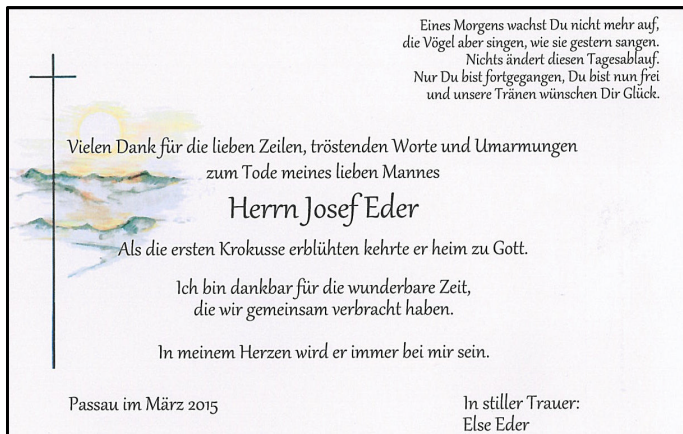
ヨゼフ・エダー氏

昨夜皆が歌ったように鳥たちは囀っている  
だけど貴方は目覚めない  
日常の世界は何も変わらないけれど  
貴方は旅立ってしまった  
・・・自由を満喫しながら  
私たちの両目は貴方の平安を祈る涙に溢れている

私が愛したヨゼフ・エダー逝去に際し、愛情に満ちた弔意、  
慰めのお言葉と抱擁を賜り感謝いたします。  
早春のクロッカスが咲いたとき、彼は神に召されました。  
共に過ごした素晴らしいひとときに感謝します。  
そして彼は私の心の中に在り続けます。

2015年3月 パッサウにて 深い悲しみとともに  
エルゼ・エダー

(文責 秋田日独協会副会長 渋谷 義博)



## 《図書寄贈》

秋田市出身の喜多川進先生(山梨大学准教授)より、著書「環境政策史論 ドイツ容器包装廃棄物政策の展開」をご寄贈いただきました。なお、喜多川先生は、当協会の元事務局長喜多川明氏のご子息です。

【書名】

環境政策史論

ドイツ容器包装廃棄物政策の展開

【著者名】喜多川進

【出版社】勁草書房

【発行年】2015年2月



## 《平成27年度事業計画》

■平成27年4月17日～18日

「全国日独協会連合会総会」(福島県いわき市)

■平成27年7月4日

「定時総会および記念講演会」(秋田ビューホテル)

■平成27年9月23日

「日独協会若手会員のためのレセプション」(駐日ドイツ大使館公邸・東京都赤坂)

■平成27年10月13日～20日

「姉妹都市パッサウ市およびイタリア訪問」(会員等約30名)

■平成28年2月

「新年祝賀会および記念講演会」

ドイツ語で格言・諺 : Alles zu seiner Zeit. 万事に時期あり

## 《編集後記》

今回は過去から現在まで続くパッサウとの交流の深さを改めて認識する内容となりました。秋にはパッサウ市訪問が企画されていますので、次号は秋田-パッサウ市民交流の様子をたっぷりお届けできると思います。

会員の皆さんからの寄稿やメッセージ、そして、ドイツに関する話題などを広く募集します。送り先は、表紙の事務局の住所へ、または、メールにてお送りください。

秋田日独協会ホームページ <http://www.jdg-akita.org>

## 法人会員

(株)秋田魁新報社様・(株)JTB 東北秋田支店様・日本エアサービス秋田営業所様・(株)日本旅行東北秋田支店様